

高校生の作文共同編集における関わり合いと表現の確定の研究

片桐史裕（新潟県立高田商業高等学校）

作文学習を他者との交流により行った。構想の段階から学習者同士の自由な交流の場を保証し、執筆、推敲、清書、評価と、全て交流の場を設けて個々の作品を作り上げた。それらの活動を会話記録と作文表現の変化から分析した。その結果、学習者自身が納得のいく思い通りの表現を作り上げるには、他者と活発に関わり、即時的に表現を修正・決定した方が効果があるということが明らかになった。「個」は他者・集団の中に埋没してしまうのではなく、「個」は他者と関わることにより確かなものになっていく。

キーワード：作文指導，相手意識，目的意識，言語表現活動，伝え合う力

1. 研究の背景と目的

学校作文教育の直面する課題を2点挙げるとすると次になる。1点目は作文教育の意義。2点目は作文指導の方法である。

1点目の作文教育の意義について、桑原(2002)は、「技能(表現能力)・「認識」の両方の調和的統一の目標が達成できる作文教育を目指して、「場」の設定の必要性を述べている¹⁾。言語生活の中で書く「場」を設定し、その「場」で伝え合うことにより個と個がつながる学習が必要であると述べている。また、桐生(2001)は、学習者の自主的な活動を保証(極力教師が学習者に教えようという気持ちを封じ込める)することによって、学習者は「じゃれあい」によって人間関係を形成すると述べている²⁾。つまり、言語生活の中で書く「場」を設定した作文学習が効果をあげるためには、学習者間が自主的に関わり合う状態を生じさせる必要がある。

2点目の作文指導の方法について、様々な指導法が挙げられているが、未だに目覚ましい成果を挙げた方はない。「書かない学習者をいかに書かせるか」が永遠のテーマのように語られている。それは学習者の作文学習の意欲の減退に対する根本的な原因分析が違っているからである。内田(1990)は教師の添削は学習者の思考の育成に逆効果と危惧している³⁾。つまり、指導すればするほど学習者の意欲減退に繋がっているということである。また、大内(2001)は、教師が作品を評価するのではなく、学習者が書いた文章が他者にどのように読まれるのかを確

かめるために、最も身近にいるクラスの仲間と読み合う手だてを講ずる必要があると述べている⁴⁾。

学習者の満足度が高く、書く意欲を減退させない作文学習とは、教師の教え込みを封じ込め、学習者が必要感を持って作文を書いたり、必要な時にアドバイスを受けられるものである。それを実現できる学習形態は作文活動全体を通して他者との交流が行える環境で学習し、交流の仕方も学習者の主体性に任せる必要がある。本研究の「作文共同編集」はそれらを実現させる。「共同」の意味は、「ふたり以上の人と同資格・同条件で関係すること(新明解国語辞典第3版)」である。「編集」とは、「推敲」だけでなく、作文学習全体を通じて「共同で」表現を作っていくことである。

本研究では作文教育の意義を学校教育活動で実現するために、作文学習全体を通して学習者の自主的な作文学習活動を行う。その活動において学習者が満足のいく作品を作り上げていく過程を観察し、他者と関わり合うことで各自の表現をどのように確定していくのかを明らかにする。

2. 調査

1) 調査対象・学習内容・期間

対象校：新潟県公立商業高等学校

対象者：3年選択「国語表現」受講者49名

課題1：模擬就職試験作文「あなたにとって働くということとは？」

課題2：「まわりの仲間を感動させる文章」

調査期間：2003年4月～5月（計13時間）
2003年9月（1時間）

2) 手続き

(ア) 授業の流れ

学習者同士が交流しやすい環境をつくるために班を編制した。下書きを班人数分コピーし、編集作業を行い清書を提出。その後クラス全員で相互評価を行う。

(イ) 教師の関わり

教師は学習者との関わりで自主的な活動を促すために次の点を心掛けた。

学習者に学習目標（目的・内容・期限）を明示し、必要があれば他の学習者からアドバイスを受けるように伝えた。

活動中に生じた疑問などは、生徒間で解決することを勧め、直接的な指導を控えた。学習者が私語・雑談をしたとしても極力注意しないようにし、自主的に学習課題に戻っていくことを見守った。

3) 結果と考察

(ア) 学習者の関わり合いの変化

学習の前期と後期を比較すると「学びの場作り」の割合が減り、「アドバイス」が増えていく。このことは、他者の表現に関わるアドバイスをするために前期の段階で学びの場作りが行われていることを示している。

(イ) 思い通りの表現ができる

アドバイスが多ければ多いほど学習者の選択の幅が広がり、自分の思い通りの表現を見つける機会は多くなり、表現の変化する箇所が増えていく。

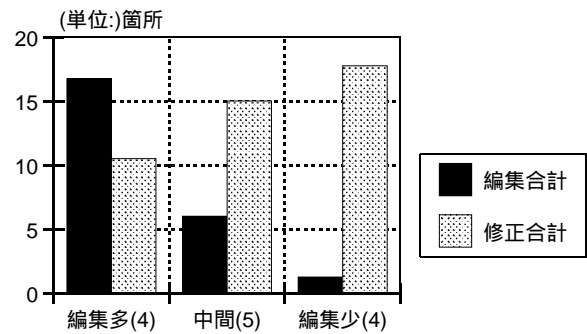
(ウ) 生徒同士の推敲

教師による推敲方略の指導がされずとも、他者との交流により高いレベルまで推敲が行われる。

(エ) 表現の完成度

調査時に頻繁に他者との交流によって作文共同編集を行い、作文共同編集で表現の変化が多く見られたグループは、3ヶ月後には修正箇所は少なく、共同編集で表現の変化があまり見られなかったグループは、3ヶ月後の修正箇所が

多かった^{図1}。



()は班数 編集箇所の多い順にグループ分けをした。
2つの課題の合計を各班ごとに平均したもの。

図1 編集箇所と集計箇所の相関関係

このことから、作文共同編集において、編集箇所が少なかった班は、個人で作った表現が完成して、アドバイスを受ける必要が無かったということではなく、変更の余地を含んでいた表現を発見できなかったか、手つかずの状態にしていたということになる。そして、他者との交流による作文共同編集での文章変更箇所が多ければ多いほど、個の表現が完成されて、修正の必要が無くなっていくということが言える。このことは他者との交流が個人の表現の確定に強く関わっているということがわかる。

3. 結論

「個」の表現は「他者」との関わりによって薄れてしまうものではなく、「他者」との関わりによって生まれた「個」の表現は、その関わり方が深ければ深いほど、変更されることのない確かな完成されたものとなる。

4. 今後の課題

取材・構想段階など、作文の推敲以外の部分での他者の影響を明らかにしていきたい。

参考文献

- 1) 桑原哲朗「書くこと（作文）の学習指導過程・方法に関する研究の成果と展望」（『国語科教育学研究の成果と展望』全国大学国語教育学会編 2002, P.177）
- 2) 桐生徹「異年齢学習形態を用いた教科学習に関する研究」（2001, 上越教育大学大学院修士論文）
- 3) 内田伸子『子供の文章 シリーズ人間の発達』（東京大学出版会 1990, PP.219-220）
- 4) 大内善一『「伝え合う力」を育てる双方向型作文学習の創造』（明治図書 2001, PP.20-21）